



79
704



門. 730
704
卷

御代比屋コシロと感カより頃茶道の正傳コトワタシと
 予の支流シラつとて是と一いひて非と
 近タカく唯休タカ孫タカ千宗且タカ号元伯タカより人あり
 生涯利門名路バシラよ奔バシラす常タカ子窓簾タカとて
 清味アキラカと甘アキラカと巴アキラカ母七十餘年雪のり月夜
 興アキラカの時アキラカ茶友アキラカを招アキラカき身アキラカつアキラカく時アキラカの物アキラカ

偶アキラカは石アキラカと人アキラカあわを着アキラカていアキラカく本来アキラカ禪アキラカ
 一アキラカ海アキラカより更アキラカに示アキラカすアキラカなりアキラカ他アキラカつアキラカ一アキラカ中アキラカに
 号アキラカより傳アキラカ子アキラカ古アキラカ人の茶話アキラカと以アキラカ指月アキラカとをアキラカの
 けり得アキラカるアキラカとアキラカのアキラカ系アキラカ極アキラカ黄門アキラカ和歌アキラカ
 各アキラカ師アキラカ匠アキラカ只アキラカ以アキラカ舊歌アキラカ為アキラカ師アキラカのアキラカ道アキラカ異アキラカと
 して理アキラカのアキラカ月アキラカ一アキラカとアキラカ一アキラカとアキラカ後アキラカ村アキラカ庸アキラカ軒アキラカ
 号アキラカ及アキラカ庵アキラカ

トシコロ

年来且翁トシコロもすくもら比清潭トシコロ
余も又つよ翁も亦居りし時翁は茶席トシコロ
ゆきゆき因るまれり通閑トシコロにありしとて
久し書爰より今茲トシコロ元禄丁丑の秋
花よりトシコロの少年来りしとて油トシコロ一海トシコロ
従同参り人ありて傳トシコロくは括中のをトシコロ

了る翁の括月堂末とゆくと
ら〜んや

河東故人鶴巢

括月集又

茶話指月集上

何子時豊后関白秀吉公始く予宗易よ臺子
の茶湯仁るこより作出かとの名流也玄哉と
つゝその古来の臺子と云は宗易玄哉所へゆれ
古流と云ふ御殿よかつけはゆのか公と流れ
後と云ふしげし臺子と云ふゆ^七茶湯格にたふ
と云流何と^五奈と^上衣いと宗易古流いせと^六和
ゆ^七ゆ^八に^九し^{一〇}り^{一一}か^{一二}ね^{一三}とい^{一四}し^{一五}と^{一六}略^{一七}して^{一八}仕^{一九}ひ^{二〇}し^{二一}中^{二二}と^{二三}

くらび口しよ

宗易為地の樹ツキハ凡ツ松竹ツあり本ツよツ茶ツ菓ツとツ人
多ツり織ツ初ツ僧ツ正ツう谷ツ妙ツくツ樵ツの本ツれツとの物ツりツと
みく面白ツくツひツくツくツ庭ツにツうツと

附 露地ロチ 南浦茶室記 鹵路ロチ 羅山文集 露路ロチ 茶道録

利休リウの袖スエのスはハとト及ツくク口ク切キとト得ツくク古コ織シる
櫃ツのツもツ茶ツれツおツ分ツ比ツ風ツ炉ツれツ茶ツ湯ツよツくツ中ツあツまツに
さツかツ方ツのツ物ツ茶ツ湯ツよツ利ツ休ツのツ外ツがツくツとツかツのツ棚ツ

虎コよツ様ツのツ為ツ茶ツらツはツはツとツてツ露ツ路ツのツ面ツさツるツに
山ツ林ツのツくツらツいツ休ツめツとツくツくツ何ツもツとツ志ツあツくツひツた
とツ亭ツまツとツ毎ツ功ツ々ツとツくツすツにツ族ツ分ツとツせツあツくツ人ツといツぬ
何ツんツのツくツ後ツのツ入ツりツよツ一ツ茶ツとツ物ツとツせツの時ツ休ツめツて
露ツ路ツのツ掃ツ除ツハツ物ツれツあツるツくツのツ毛ツにツくツせツ信ツれツらツい
初ツのツ後ツハツくツ茶ツのツけツとツかツしツのツまツくツ掃ツぬツ功ツ者ツ
也ツといツるツと

何ツかツ時ツ行ツ言ツ屋ツ字ツ毎ツ茶ツ湯ツよツ始ツのツ入ツりツ小ツ亭ツまツとツせツく

只今名水到来いそて釜と川とチのよへ入るの
 石に字易棚しつろ子ゆぐべとあはし一炭とる
 中内まいと亭し主あま釜と打出りりく炭とん
 と釜と掛か手と席にるしつろ茶湯とん
 ちあつるしけかしく三斎と夜くいめさういせ

附

其比は言天下茶屋の水 大同し中内賞致あといふ
 と名水とつるかしや系あしく醒井柳水字路まて三回

休子水鉾の前か石へ下人ご同と困ぐせあはさ

ちよつとくくべあうと捨を外へうりひまことけ
 杖しつろあはしあのみまきさうよりわさく捨まひ
 無しつろ

森口しつろあしつろの院あり利体とあはさり
 きとしつろあ茶とあ人と約とあはさあはあ大坂
 よるあまへのあはしつろ院とあはさしあはつにせ
 る子あし亭し主あはさし庭へ体内よ入栖居つと
 ちひくあはさるあはつあはさし窓のまとい人あはさ

附

竹筒 葦山竹 小田原歸陣時千少庵へ土産也筒

裏ニ園城寺少庵ト書付有リ名判也又此同竹

ニテ先ツ尺八ヲ剪 太閤へ獻ス其次音曲已上三本

何レモ竹筒ノ名物ナリ音曲ニ利休在歌アリ其

文_三今京ノ人所持ス

古織菫の花入と為板子に並とそがと休称

しそ右人うと板子のせ来とそがとりとねと

是のお舟子しそ成とそとせとよとらとに並と

利休盛何れと束のしそ何しとんかかしくな試

よ折ちせとせととらういとがと人か感しゆ

休やしもとれし今日のあひ京のしそや肩衝し

茶ととれ何日の塙の人しそや束しそ茶のしそと

いぬ

附

其時分京しそいぬとそ何とそ何とそ何とそ茶湯の塙よ及ん
天正の末より京盛になりて塙の衰フ

去の比 秀吉公ちさか金カネの鉢ハチよふと入と床に
たはさせカタラ傍カマし紅梅つゝと玉タマさうと宗易ムネノカミり
巻マキのうり向ムカのまとい作ツクらば近習チカシブの人々難ナシむか
とナヤカ呼ヨむと宗易ムネノカミの枝エダうらふにたり水鉢ミヅハチ
よりうりつとら入イらむとい用ヨウこそとカとカ蓄ツクリとら
まーり水ミヅとにハはハとカがカうカえカといカとカ風流フウリウゆカと
みカかカ公カミ何ナニとカせカて利リ休キユりカとカゆカらカうカと
とカれカとカこカゆカらカぬカらカのカもカの上カミ意イのカ感カン斜カをカらカ

休イッ何カか時トキ中ナカ柱ハシ入イりカまカがカ小コ座ザ敷シりカ自在ジザイとカ茶チャと
けりカとカ独ドク何ナニをカ取トルへカ少コ庵アン足タラシ舞マユりカけカ座ザ敷シりカ自ジ
左サ取トル合カヒりカすカとカ又マタ休キユげカりカとカ誰タレもカ釣ツクりカ
とカれカをカこカちカやカのカとカ何ナニとカ少コ庵アン誰タレがカけカらカうカと
向ムカよカとカかくカ自ジ左サいカれカ何ナニとカしカ推オシらカのカもカへカ入イり
今イマの人ヒト自ジ左サあカとカ茶チャとカそのカ時トキよりカあカあカがカ釜カマと
少コしカけカりカとカあカあカにカ何ナニとカあカあカとカあカあカやカらカに
釣ツクりカてカもカえカらカしカとカしカげカりカとカせカがカとカ也カ

何れもかしこわいんさつり以機此御不
千宗且茶湯の御成何りく御成いとこ
且常の毎り茶以點く茶椀と以前へ
かス御不なんと宗且臺天同かくい何この
人へ茶とよつくとおととい何れは且此の
御りれが貴人へ進上中いり進たう御容際れ
小庵おろしめくあるゆをく御成何といさく
およりのわさとな人のとくわかれもかかくい

其う色びくい長押子張付あふか口をよまに
臺子と飾り茶湯仕と宗易教弁るたかき
侘とあし何りとそえ悟つて竹椽鏽澀屋やう
の栖居よあつてい智いゆへう屋のふ庭あに
そと屋子取合中いりとい書院いりい臺子かたり
そ中い後何れをへい出あそつていりいり
臺天同かくい茶とすさゆりんとし御不最
しい坊りいりい機始よりい茶すりい不御遊

内もやかとし

何か秋不審庵よりあつて源又よとらひ休
短檠より他をせよと何とて小姓出くよにやとに
ますやとささやうにますいぢれことめをくゑんぐと
まづぐい咄をぬものぢやとらひ

秀吉公宗易へ大仏の内侍とかいひて茶湯を言
るに誰とといふ何らし丹易志うらむし思案し
る安う仕るごよーとよ

休何か時育樂三斎織部やとてよと云よかきひて
何れも水の柄抄一本のいぬおとてしにたよと人
私れ好むいんといふ初再會より何れも初泰何り
物教尋らるとくるがより休の好むよかたひつて
そととてのくもとてうらとて中て及いふかよ
のこらひ

宗易花のけうか侘とけいひと東のへつらとてら
めく其方右より釜とあつてく出るとよらわとつて

附

是^レ重^{オモク}々^{シキ}敷^シ道具ニサビテ軽キ物又大小ヲ組
 合スカ好^{ヨシ}ト云フナルベシ音^{ヨリ}肩衝ノ茶入ヲ
 出スニ六為茶ハ束九壺ニハ中次雲龍ニ盥^{タラシ}ノ水
 指大風炉ニ小板勿論ノ事古織ノ細口ノ釜
 ニ小フリナル柄抄却テ取合ズト云レシモ亦此
 意ナリ

利体ハる分の宋地拜領〜〜家傳〜〜

ゆへア〜色千鳥の香炉^{宋祇}千貫〜求〜ヤ〜時
 うの分^ス復^ス置〜〜み^スか〜と体^スの妻^ス 宋恩^ス〜れよ
 り〜せ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
 一^{ナリ}截^{ナリ}入〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
 玉屋とよ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
 奇〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
 とい〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

附

古来香炉ノ茶湯ト云フ有り其故実知ル人
稀也先年三奔公ニ宗易ヨリノ直傳有レシ
三宅亡羊香道ノ達人タルニ依リ奔公ヨリ六
羊へ御傳授アリ其後亡羊ヨリ藤村庸軒へ
傳へ田子浦ト云フ香炉ヲ与テ印證トス
何カ時蒲生飛驒殿長岡幽斎翁兩人利休
所ニテ茶湯ニシテ後蒲生及子ノりの香
炉取留りて休喜真中ニシテいやく香炉と云り

かゝ灰と打回をいれりかゝらぬ翁清見
湯の哥中らつめりて口ノ人々休喜と云り
いふにもやうにいひのむよりあり

頃徳元沖百首の中より

清心くくきもゆよあ浪れうへり

月中心くゆなみけりあうりふ

このらゆのきふあ茶湯にともゆはは翁
よかしくおんとや無用の取留るゝかとい

あふりも村千鳥と香炉しつゝそふかま
るしとんく何事も奥のさふかあし
しとたふ忽ちし風流作りはか埋^{コトナリ}ちさ
あともんくゆか

或ハ云ク廿歌千鳥ノ縁アルニヨリ南産引合ヒテ其心ニカナ
フ奇ノ本名ハ千鳥ヲ賞スルトツ

豊后殿下西園退治のせりし帰城の取次易
も供奉の尼崎しゆく教内紹介の左取とるく
あとのと^ニ階しけか後紹介何れともたはいつたの

おんと何ともしをり姫瓜のむきくゆきどつを
あまありかあしとみしと其か何とゆらほし
とあふ紹介しつゝいなかをきとせの葉しつゝも
入るがしよれ生れんうくうらぬ^{カサ}く一校
さう金の花入りり姫瓜ののかと床^ゴ海すくせを
そがうしつゝいふがしつゝあふくきうは是よりと紹
知其花入と秘蔵しつゝむめ瓜と名のく紹知来
のあふて後もあふし侍人くといふ物と

附

天正十五年しご秀吉の西征之事幽奇翁道
記二載又其記ノ畧ニ同年六月八日利休居士
取へ関白成秀吉云後陣のつとく祭のつとく内
はかるこより一河ま箱崎を八幡のつとく
神代りとあえは原松の風幽奇
千宗易よと

河内うがらのはみこりよみよ

ころこも同ころこも同

とつひからさられる在事に 同

河内うがらのはみこりよみよ

ころこも同ころこも同

体虎の尾とつみ草花面向さりのころこも同
のからり

ゆか時る安我とけとく古織の茶湯ゆりら

亭主鏢のがめく炭取のつとく安灰土鏢とりら

正徳二年

よせ炉中とくくとおし〜後炭と通しその炭に
に奥〜入平帰路〜およん〜獄戸いとの
字通なが〜炉中のお〜此のあ〜そい
と〜し妻よ〜字通〜も何は何れも何は炉中
あ〜く〜い炭がまれぬ〜し〜

小座敷〜衝上とのあ〜はる床と口又三寸
よ端〜かいる安〜く何〜し〜が体もよ〜し〜お
りし〜か〜やそのぬりにおの〜し〜床も〜も

ひ〜い竹よカハラケと〜し〜も〜か〜と安金カネにせ
柄エと付〜り体〜し〜め〜る安〜炭〜く〜い飯抄子イハシ
座〜り〜してぬし〜き〜は〜も〜後〜い〜と〜と〜用〜の〜
体〜衝上との床よ〜と〜を〜ら〜〜い〜あ〜く〜不自由が
あ〜は〜か〜人〜と〜く〜と〜し〜備〜と〜や〜り〜して〜は〜は〜を
あ〜〜し〜ん〜と〜や〜と〜座〜り〜にアサ標サシか〜し〜わ〜い〜ぬ〜と〜
いぬ又座〜り〜掛カクか釣舟の折釘も〜し〜をのサお
舟折〜し〜内〜し〜は〜〜く〜し〜〜し〜〜し〜オカリ下子サがめを

ふかききもあははうてあ〜とよみけん
ふかき

附

休之意ハ漢陰唾桔槔ツ同日論乎

宗易つつのけりきん三奇一法奇ハ露の苞丁而望中
そとんおそ露きおくて露〜して何を〜
きかど易称〜と後末那板の恰合す〜と
〜と〜といわ〜と同一奇厨右にハ吟味何をと

此之法のつか板あ〜びゆ〜と一分〜と
あ〜とゆ〜と其時奇〜と扱〜のま〜と
同銀と〜と

附

三奇ノ翁吉田〜ハ入ハ時亡羊ハ四也〜と
あ〜ハ予〜と毛〜と利休と吐〜と中
この法服指の鞆と好〜とあ〜と体よ
とる〜とい前〜と見世〜とち〜と鞆と

うつらぬも拵合々くまのあなすはのの靴
形何より足車なれいり入ると何んそ
多ひそりてゆり土着の内りのうそくそ
しうとにぬん口好くまそく其靴なり
き及つとくみ予うやの越中流く人の
ゆかしはかにはあまはいつくそかひから
ぬんやくそまんとくえくのうくぬん
其靴すくにもゆううてそくくゆんそと

本^ホらしてあしゆみとく服指の靴も同
く色りくく亡羊へくそましく又か
方ゆく体小刀の入車何うて借のまは
ゆりくくは靴の彫の誰とくうぬえは祐
葉の管弦の柄くく名何か物しくつん
くぬの柄の小刀右の面白うかしく貴所
年くは似合やうすくしゆあぬし好く
くつんううのくつぬきんと物くが

四一



おと今に秘苑して持とく是もいふ
あり両面南籙ゆく形い虫栖しつもの
くありて模様もむとと恰合申し
みえのかりし七羊奇庸軒へもま
とい

薬院の小座敷の宗易其地を極く指圖し廿
大工より互よとつし付しとん本間うらぬ置入
継却くおとつし海くおとつし

体常に茶湯の俗人の装束れ屋に成りしは
このし事少々に仕舞うよれしとつし
色紙の釜くくくおとつし時休も入りてい
ゆく団炉裡しとんか釜とのを五徳五ふれ
自在し釣く茶湯ふくくおとつし又一とせれ
る同ちの煎く雲龍の釜のを何して宗易
り茶と點よく作しが折しもの進習ゆりて
十服づらり煎くかに其湯始終こめりし

れん

附

雲龍ノ釜ヨク銚沸シテ茶ヲ點ル毎ニ水ヨキ程ニ
 ナセハ湯ハサメヌモノ也又雲龍ノ釜ノ内ニ湯少
 ク見ユルヲ嫌イフモ八九分メアルヤウニ水ヲ指合
 セ茶ヲタワル好ヨシレ仕舞ニ其マ、蓋フタヲスレハ湯
 煮ニコボルユヘ湯少シ抄ニ汲上水コホレ覆ヘ捨テ仕舞
 ガ故實ニテ有ル也是モ亦古人話中ヨリ傳フ雲

龍ノ茶湯ノ趣キ不圖トコニ記シ侍ル今世習号
 之ナ掎ニテ録テ茶録ノ類ヒ可否紛然トメ信用シカタ
 キ事トモハイカニソヤナルニ依テ古ヘヨリ何ノ道モ
 相兼ノ正キ師ヲ尋子程門ノ雪ニ夕、ズム志ヲ
 称ス

げーいひをそのの炉及く成りて極して塞こ
 風炉とよめうへくくばく釜と録又ハ自在めて
 も約を因炉裡ぞくくの履にはあ括と至合セ

おのれ集
二四
ふかやうにぬくべしかりとるやとも感う
色竹猪のこころもこころよぬうこもが
ふせりしきと

雲ふとの所肩衝埜の人お物しそはう利体れ
と招こくろしうく茶湯くかそれし体一向
案につくぬ新し亭に客降りく後苗世体うも
舟つぬ茶入おもちぬうぬとらうく五徳し擲ら
破さかと傍しあまが知喜の人もらうて歸り

ふづうぬ継ぐ茶と僧しうてい体よとせ
そつといそぐし茶入ん事うとてこの外
称羨とようくけ藝もこのおる方へつひやう茶
入秘蔵せしとよして度しぬりの後件かん肩
衝子後太守價千金しぬ求ゆくげしこの継
目しぬぐく合さうきかと継うとくいんや
と小堀遠足へ相談しつと遠足廿肩衝破しゆく
のさうと合ぬしとてし利体もおとしぬうと

茶話指月集下

天正十四年癸繩

源君濱松より御上洛河をいりては時豊臣関白
大坂へついでに御上洛河をいりては時豊臣関白
易とて茶を飲せしめりし御上洛河をいりては時
豊臣関白御上洛河をいりては時豊臣関白
易とて茶を飲せしめりし御上洛河をいりては時
豊臣関白御上洛河をいりては時豊臣関白

附

指月集下

茶壺ノ勝タルヲ元真壺ト稱ス其次ヲ呂宋ト
云フ文祿癸巳ノ歲塙納屋ノ助右衛門呂宋へ
渡リテ真壺五丁取リテ歸リ太閤ノ上覧ニ入ケ
レハ宗易ニ甲シノ只ヲ分タセ價ヲ定メテ取望ノ
人へ遣スルト也

宗易が盛河跡より東へ隣の澤とぶらぐらんと
ぬも中次いふと入ぐ真一ぬもとつひり紀
三より東へ塗みじしとぬもくももろとぬり中次

是を秀次藤重とよとと

附

先年千古宗佐物語ニ音ヨリ中次ハ疵アルヲ
嫌フ東ハ厭ストイハレシモ此意ニ合フ

何れ時有利休方へぬ何れにぬりぬ茶
入り古蓋を合居るが其うら大ぬりぬ
のうや何れぬかと却くおとぬりぬ
る樂へらせりその後公の景入り件のぬり

有ることを合せ体へいさへんてうらうの也故奇
一概イカりうらうとありありせし茶入りの新蓋
のよく合はうゆりゆくゆりゆり

体障子の紙中のけむり一分の細一分の好
いとやぬ

利休各登のとよとの席あく勢多中の檜ギの擬法
昨れ中に形のみよまはう二つあるん分は入る
あやとらば其意古織居るをそはう似よ

ろくは何ともあやうじあり晩方うらうら
とそよよく休何れも用入のそよとつやと停や
別義とよんはどやう一試しんん分ケルらん
そよよくや打あく勢多へあう只とらうりし相
二のれ擬法昨れ茶おのそよとあやゆり向きこ
まし休りにもとそあくゆり答う一府の人古織
の執心とて感しやあまこ

宗易 太周の命り宵く此予又徳もよまり系へ

宗直

かゝる山門の前めく利休の茶也くらのつて田へ
へかゝる休茶也くらのつて田へかゝる換投のり
かゝるくらのつて田へかゝるくらのつて田へ
休茶客から後何分内太周同炉の形何うといふ
何りくらのつて田へかゝる利休の茶也くらのつて田へ
何りくらのつて田へ

権現様利家公兼く宗易事不便くせむし
よれりくとゆかりく少庵道安門免の口取成何
そんく下りまき早蓮門ゆかりく蒙りくの後
乃安と口前へりく口を半く茶とそんく口を
上見何りて宗易がよありくよく似そんく口を
口威りく口を

附

宗旦始の苦卓の喝合めくまきく秀吉公
夜に宗易へ口威の時分門給仕相勤と門足
却り何分により宗易の教寺をくかの喝合

おらねせよとの上えおく長櫃三棹拜領
せし利休所持のるきとしつをかきおひら
千家よりおく宗旦お父のうららるる
天正十九年正月十三日宗易 太周の御勅
宗と蒙り不審庵とおく塔へ塾居晴り小
東一ツ茶す袋と左右の社中よりおこめおれ
いのりて塔へおとげきより流布せん茶師み
えより同くおめかへ入けりおんやうとに

ふきんお本しおぬしおのまより

うやこのうららもほよおん
火中

先年お自筆の文人のしせりあし不曲其心
可知又利休生言のしおめおは河をたけり
くのおぶにあれうらあうとさゆしと宗易お
のるきしお自愛し成りせしものお救奇
おひき人のめぐゆるしおたりぬ又終りし
のしんく小姓よ茶と點を飲とちかたこれ

茶梳とよりの無用の物よと嘆く夜よ
擲く^{ハタ}つねにゆるりし甫竹とよりの拾ひ
何れも継合せと其より侍人くとと大坂の
里くやうの物よくと海とつれせうかよと
其人とよるふうゆんし

天正辛卯二月廿八日利休居士辞世

人生七十 刀圍希咄 吾這室劍 祖佛共殺

授うらうえき足の一ツ太刀今この時を天よるをうの

一とせ信長公よりの宗易へよりの肩衝沖取望の
よりの作部かとの比利休天王寺屋宗及し不和
うまことよりの肩衝取持とがしよりの公へ換授
いし茶入るに河をよると天王寺屋宗及分の黄金拜
領とあまによりの宗及一礼かんとり利休へ持肴黄
金ちちよりの徳が休りの役者にあつことかんと夜
茶入るに依帖よるあつりよりの換授の
あし日比の不和よおつことあつりよりの

あつたう人あてこの贈り也受るる道理なりとて
えん時ちんやの私うりあつたうと稱へ

附

信長云へ宗易此肩衝御挨拶申取ニアラス
ヨリ向公作物ノ御茶入ノ袋ヲ易へ仰付ラレ
時廿作物記ヲ相國寺惟高和尚書タリシト聞
汝知スヤト宣へハナシ候松永彈正茶ノ會席ニ
一覽申ワルガ天正五年ノ乱ニ信貴城ニ於テ燒失仕

其字塲ニ御座候トテ取寄せ差上侍ル

音年宗易茶茶の新舊可らずとつら價
と定けし私曲何あし太周へさし
志何りし一夏とえに宵のし人絶し
客にあふもの私曲何しと宗及肩衝から挨拶
抄めくあふし抄りし本儀と龍寶の山門
舟上舟岡の墓をがしと何れし水新よ
用かといふ人やむ借しとつらし

色とも聊聊至處とりく痛きく儒く天地
 同根萬物一躰しつみ釈くいせ伸一如した
 て没後貴賤とくく其靈牌と伸殿よ
 至高僧碩師といひくを拜とみく陀号とて
 授授ありくくよ古くの楊杭礎るの類も
 つしん子水新く河ぬくめ并華水と湛へぬ
 とく人りのくもみ子にじとみ漱く所公地
 清涼くくじ夫如来よく物と轉轉りくより淨

穠不二のしつると何と悟んか人千部り
 傳人未だ利休く四方佛の新きまの仏也
 河ぬと妓ギ王妓女ト刀自ト仏ホの遺像なりやいぬ
 ちりし是も物くくつしんをぬくをがぬや又を死
 ち海より石灯籠の火がうかばう晴嵐陰雨水
 年へかたと庭くくつてもものといふぬく
 寺社の四流遠山深林の中にあるとらうのれと
 何りうくく望び人少くくいと名なきこと

ゆがきて去日の後堂の灯籠三月堂も建長
六年十月十五日と彫付るが古代のとのり
系ゆく高桐院の燈籠利休取持今
當院有馬才一とし
其外太秦もゆるせしこの類ゆらるるもの
しりてくわはんとゆるとせ

口切の時分宗易とが徳のくく鶯屋の宗安ととも
ゆいゆい池とまの病地の中垣ナカキしりあはぬ戸
と約りする宗安さびしくかごとく海くゆと何と

易わきしひさしと存きは却と法攝成と約
戸とくせなまはんとくましくゆらるるゆらるる
よのりやせり来がゆせりんとその人足ホの難用
まひるがへしあはぬ徳のゆらるる自所戸あは
ゆらるるにも麻桐とが核戸うわしわらうしんり
戸屋さやうゆらるる松板の板くひ續合せり戸の
ぬきんとつひくおまをがとこのまの約くを
さびく面白くとやへせきやうのくく其人の

茶湯をみしゆり

何分時今日庵に古宗依へゆりて宗易の尻脹
中茶入と嗜く二のちと可物と一の三奇へゆ
りぬせ一の平らぬよゆへそかともよと時煩し
厨之りゆとよとの姪の九玄茶入り其茶入替りぬの
り金子細うせのちらりのちりくええぬわとん
先しりきりばかりのともちぬくうりちせやしの
ぬん茶入を何れ茶の一品さるるとのぬりや

しんき

附

利休の静かぬ寂するを好きてせうり
物と愛せしと妻本といふは可物の茶入も能く
とるれ一もゆりゆりよしみまが人志の
しんき也

今日庵宗旦老人之別号明曆丁酉十二月
十九日病終于家 年七十八

圓明禪師贊於其肖像

今日庵中曰主人 一生竟不走風塵

莫言這裡絕消息 寫出丹青面目真

秀吉公聚樂しかりし時しはがらけの雪れぬ
宗易とてしるし町し茶湯とてふりの湯と
いふるしに上と賣よ針屋ういしととげうぬい
汝とてしるし河成河とてし人うとて河成河
河成河とてしるし茶湯とてしるし河成河と
河成河とてしるし茶湯とてしるし河成河と

人の身に河成の河成あり及の音のうり登ら儘
河成の河成あり及の音のうり登ら儘
も茶の徳とてしるし

附

つとせ休雪の曉葎屋町の宅よりと葎屋と
まゝく詔知所へとての詔知しるし河成地し
へりしそのまゝく詔知しるし河成地し
千鳥の香炉火れたかとかとて詔知とて

右の神より後を詔ふたのふにうきとわ
私も懐中いもくたれより香炉ととも
休むをりて入真きうゆとて

太周友の以大仏院へ所成のとい宗易し
けううゆつきとゆか幸窓前より入まら
るそこよりくもくそかあり其うたに
入のらきうゆさにあうらうさくも
時くえくの風流一ゆきも

附

利休物数奇羣ヲ出ルコト多カリ音長岡休
夢ノ茶湯ニ因^ナ炉^ロ裡ノ内隅^{スミ}モナク口クニ見エ
侍リケレハ庸軒其席ニアリテカヤウニモ仕リ候
ヤト尋申タレハ宗易折々カクセラレタルが面白
カリツルトテ三奇ノ嗜^{ヌキ}ニテメオレタルヲ我モ見
習ヒ侍ルトノ給フ

又元伯老人休よりとの傳ありて風炉内に

其後風炉の茶湯よりつゝはきみ拵の如
く蓋フタと水とくぐりてこのまじり板イタなり
とのうひと茶中とて並ぶるひし

利休の家年の口切しゆゆ丸釜とつゞし
あましく例の七人前ななびらかきこする祿ろく家
其うら獨ひとり似にか釜かまえかき茶湯より休やすみ
物もの救きう弄りやういもいも玉たま瓶びんぬぬと存ぞん家けとくへん某なつか丸まるふ
とあこい却さかてヨホウヨホウかと押おかきしうしうい

釜かまよく似にあましくともや并なら二義にぎにありとも
海うみくしとふととよむ名物といふくく祿ろくのも
かひいどいどを以もつ勝かつ進しんぶ所ところあましく并なら二ににあり
又また重名じゆうなのありとをかきし物ものもありか
んん并なら家けり宗そう易い作さくの竹たけ輪りん所持しゆじの事こと
か引ひきんきん太守たうしゆう御所ごしょ望ぼう河かりくくの物ものせしむ
りつりつと地ちとくとく以もつ秘ひ義ぎの物ものり黄金くわんごん數ず片ぺん
賜たまふ是こゝも宗そう易い子しうう物もの也なり

釜とよが時重カナ子が環の内へ指サシとつまツマと持モチを三下
六る人の救珠といまイマがやうヤウあアくク河カとト嫌ケン
ちあチくク痛ツのノとト持モチたタあアくクいイ子コ内ナイに載ノくク持モチたタ好ヨシ
凡ソボボ所所敷敷の客今の座イに居イ替カがカくク席セキとトし
ふフとトくク昔コトの人のあア後ノチ同トウ一イツ所所にニなナとトかカし

附

四帖半のゴウたタをセカカ替カりリまマがガうウとト申
傳ツふフ 古宗佐物語

阿弥時宗且走人予コ久須見クスミ 糸席イトセキあアくク咄ツとトあアはハこ
ゆユくクをセ昔コトの病ヤメ地チくクぢチやヤりリ土ツチとトあアくクとトあアぢチ
あアもモかカをセいイはハしシのノあアがガしシのノあアやヤりリとト堅ツくクあアて
とト水ミヅ鉢ハチのあアりリをセ人ヒトいイまマがガりリうウにニくクあアやヤりリ
又マたタあアぢチもモ今イマのノ人ヒトのノあアりリとトくク柄カバ抄シウの
うウとトあアくクこコをセ人のノあアもモけケしシにニうウりリ長ナガくク成ナるル
あアやヤとトつツひヒとト笑ウぬヌ

附

指月集下

休雨ノ後山路ノ處^チハ^ロビヤリノ出タルヲ見テ面白ク思ヒ
カク置シタル故古人ハ^ニヤリヲ置ト云テ打トハ云ナリ也

天正十六年十月北野大茶湯中時豊カ公
宗易と召けとぬれ方々茶亭の風流冲遊
覧ありく烏丸亜相乃くこ居カる前とるこ也
殆ど易このうらによれ肩衝の庭いとちく入
りつと也此同にくは

ふ科のほくりにるくりんといつか俺ありが
常に^テ取の釜一りあり朝毎^{コト}糝^{ミツ}といふ也とある
そ先食し終りく^キ砂^サありみぐさ^シ清^シみ^ツあれが
うとと汲つと茶と樂^{タケム}しと久し一首の狂歌と
よみまが

くひごりりやよかのれい口^クありが^テ
増みそとくと人しりか^カな

阿か時利休日^ニは^シずをよみそは俺し^シら^シて
らん^トく^クあれ^レは^ハ休^ム日^ニは^シず^をよ^みそ^は俺^しら^して

くつんが家の外^{ソト}面^モに石井あり休人馬^{ウマ}ん控
塵いぬせうとまかどんくけい水^{ミヅ}もく茶^{チヤ}の飲^{ノミ}と
各^{オノオノ}とゆ^ユんとつひく^ク座^ザる^ルとる^ルらり^リつん
守^{モリ}のを表^{ウラ}し^シお^オく^クよ^ヨじ^ジう^ウを茶^{チヤ}の水^{ミヅ}の^ノ筧^{カネ}取^{トル}が
り^リと^トも^モお^オゆ^ユり^リ何^{ナニ}か^カう^ウとい^イふ^フ休^ユの^ノお^オれ^レ人^{ヒト}
う^ウと^トお^オね^ネと^トと^トま^マう^ウり^リ茶^{チヤ}事^{コト}ら^ラぬ^ヌよ^ヨく^ク時^{トキ}と
う^ウの^ノさ^サと^トか^カと^トお^オん

附

い^イの^ノ中^{ナカ}ん^ン流^{リウ}き^キり^リき^キん^ン下^カ京^{キョウ}に^ニ福^{フク}阿^ア弥^ミと^トい^イぬ
俺^{オレ}の^ノり^リき^キり^リ是^{コノ}も^モ家^{イヘ}の^ノ貧^{ヒツシ}と^トい^イつ^ツと^ト茶^{チヤ}
三^{サン}昧^{マイ}め^メく^ク言^{コト}し^シけ^ケか^カう^ウ一^{イツ}と^トせ^セの^ノま^マあ^アと^トま^マ
く^ク座^ザさ^サし^シこ^コと^トに^ニト^ト傳^{デン}ふ
燦^{セン}く^クび^ビ門^{カド}松^{マツ}を^ヲく^クす^ス餅^{モチ}付^{ツキ}う^ウん
く^クが^ガ家^カし^シも^モま^マい^イさ^サに^ニま^マり
お^オよ^ヨり^リと^トあ^アは^ハは^ハの^ノ俺^{オレ}を^ヲか^カ人^{ヒト}桑^{クワ}門^{カド}ら^ラき^キぬ^ヌえ^エ
人^{ヒト}の^ノ榮^{エイ}耀^{ヨウ}林^{リン}下^カの^ノ幽^{ユウ}閑^{カン}し^シあ^アら^ラさ^サが^ガこ^コと

つととかり生涯梳中の物と云く器具と
とがのそに何れと富か人も繁花を世
事心と惱ナヤ一歌舞の宴席却く氣とと
こなりぬに至りくもつりくも静處よ退し
く心氣とや一みんとかもつ只い物よ
託一く塵胸ととく俗慮と消遣は个
夫古へ柵尾の上人宋朝の茗実と山園り
培養ふみい一より遍り扶桑に生茂と然

舟予嘗くくと海う一の鳳團と試きゆりし
近世宇治の極品りおよひひへうく茶
にをまが人のゆりさく抑らに能く清閑
とうが人ももみん無心の妙處よつがと
惣く一味の極とわいも人或至人の無味と何
ちらよむことぬ一味と賞とがも不可いん
同予茫然やくく答がくく何さい時よ
疎慵の竹影漸くぬきに昔影人と云

茶話指月集下終

元祿十四^{辛巳}季孟春望日

洛陽 堀川通四條之角

今井重九衛門梓行

藤村庸軒先生畧傳

先生氏藤村號庸軒又曰反古菴本氏久
田後改於今氏佐二木出枝葉也為人幽
閑淡泊好讀書善辭章常慕陸鴻漸玉川
子之風嗜喫茶 本朝自古稱茶僊者子
利休居士也先生漱其芳流極其蘊出淵

源雪晨月夕招好事之遊侶論雲萃出美
色次水泉之清味茶話終則賦詩作歌
此自娛餘外不足取出元祿己卯九月十
七日元季八十七病没于家所傳之茶式
載在指月集所人得其術者甚多矣予曾
會先生子詞場者式甲度見其清標竇非

尋常之人今既入鬼錄甲勝惜哉追憶往
事亦正略傳

元祿庚辰十一月一陽來復出日

宇遜菴的書



右茶話指月集鶴巢子之所筆錄而庸軒
翁之說話也翁為人穎脫材出於世俗之
表強壯好學涉獵經史海習者義親戚
朋友會聚其講筵者不少旬勉勵人善亦
有年晚季尤慕廬陸之風極閑靜之趣
精於茶式巧於茶技物庶幾為當世之鷗

休也歟其門弟居多則不可謂之誣矣予
固不識系事雖久斷知聞少年之時如
云講筵親炙有日舊文之好鶴巢子之請
不可得而辭焉故述梗槩聊當跋云

辛巳正月乙未

田邊希明識

一日をくつりて名物記と題とほり
いぬしゆよるし秀くかも書とぬしけふ
類はかりし聊覺束なにも加りぬ今奇
軸珍悉洛中人口ぬゆかものそれ來由
とそこの祿ふと次は新古と分とく漫
よ記と前梓子載かとのい贅をん

一後鳥羽院宸翰尊影

賀茂松下家藏

上ノ色紙形ニ御製三首ノ贄在リ
一説贄ハ
後宇多帝勅筆

松下ノ祖社務氏久ハ院ノ季皇子タルニ依リ承
久乱後隱岐ノ島ニテ御ミヅカラサ尊容ヲ写
之氏久ニ贈リ賜フトナリ又世ニ御自畫自贄ト
称ス歌仙ノ色帝虔々ニ散在ス圖様ノ風格最

一般

指月

一後醍醐院勅作茶器

号金輪寺

芳野吉水院竹物

世間ニ偽作多シ偶真ノ同器ト稱ノ貴重スル人
アリ茶湯ニ出スニ金輪寺會^ア款^クト云^フ申傳^マスル
人ノ云^フ禁裏^{キン}寺^リ八^ツ天^ノ皇^ノ御作^ノナレ昔ヨリ松波ノ
盆^{ハシ}ニ^ハ口^ノ来^ルル^ノ由^ノ古^ノ織^ノ記^ニ置^レ候

九條殿

一新古今竟宴御懷紙

後京極殿
御自筆

此御懷紙和歌入續古今 元久二年三月廿
六日新古今集竟宴御懷紙

後京極攝政太政大臣

あさしゆや、まるとまゝの海よし
花うひし玉のみりれわを子

烏丸殿

一定家卿新勅撰

東山殿ヨリ妙善院殿へ御譲リ候傳書西三

條實隆卿ノ消息并上裏ノ紙ニ玄旨法印感
得ノ加筆分明

同
一蔦細道硯箱 蔣繪 又名角田河

斯硯先年明曆の比

女院御所写サ志ヲ移ク岡東(ト)ソセ給ハシ

同硯箱

玩物取藏家有時而变故此以下惣除家名然既帶其名稱物不除

一恙の千年
一卷の白川

一三かき山

盆石

一末松山

桑華ノ記詩歌等副^レ爲^ニ往昔^{ソノカミ}アル人唐^{モウシ}ニ渡リ
徑山寺ノ岩尖^{イハカサ}ヲ研^{キリ}テ歸朝ス是其岩右之
ト云傳^ヒフ凌霄ニモ石痕今ニ存スト云^フ

一殘雪

東山殿御物

一小廬石

同

一富士石

古ハ独ノ閑人嵯峨ノ清瀧ニ遊ニテ自然ニコレヲ
拾^ヒノ由時ノ名宿文人太^タ称ス其盆中雪景真ノ
士^{コトナ}峯ニ異^ナラス

金華山

叶奇石昔慈照院殿赤松某ニ賜^フ玉仲老禪
記并詩春屋古溪和韻在リ

相國寺
一虛堂墨蹟

同
一鳴鶴繪 二幅對

一清拙棺破墨蹟

一定家卿八條院文

字 八條院於御會愚詠趣以尋得微
笑指落月をわやとおもふをうらみおくりす
心乃外の春れよの月とくしみし

極不審共先安堵了聊於龍樓可申披候
也謹言 二月十六日 定家

式部權太輔殿

一同慶賀文

写
慶賀事

右久積鳳額左使し曰勞遍浴虎貢
中郎之朝恩自愛せ初々々

祝賀礼殊抽感懐

互昇るたつ乃心おもしろけれかしあゝ時代の
ころのうらみ人併胡洋酒し次々して

廿六

左中お定

頃、老友ノ物語ニ予カ若キ時分定家ノ掛物トイ
ハ先小倉色紙安樂菴ノ懐帝ヲ称ニツルガ次
第二向上ニナリテ今ハ个様ノ文ハ小倉ニモ劣ラス名
物ト人ノモテ離侍ル也

一宗祇名ギノ黒木文

利休取持讓於
勢多掃部

写 此黒木危崎へ成やり池田へ成やりと
ら作しこの紙は五々又アゝ成成と〜し同紙
八月多し守紙と〜し七月七り 宗祇判

与守部成

とつ巻白

梶をかり草乃成と物

以具し

抄月

里村

一宗祇像

表具、裏書云、

自然奇宗祇居士之肖像繪并歌等近衛殿
入道殿下 御法名龍山之尊筆也

于時天正十七年初冬拜領畢

法橋紹巴判

千家 一利休像

春屋國師、贊頭上巾、兼手中扇、嚴然遺像、舊
時、姿趙州、且坐喫茶、底若不斯、翁爭得知

一古溪墨蹟

利休取持出百會

此墨蹟文字少、削タル所アリ、休カ友何トテ
和尚ニ書替テ御、モラヒ候ヌソト向ヘ、休書テモ
ラフハ易ケレド、態トハ出来ヌモノナレハ、痕ノ見ユルヲ
厭スト答フ

指月

八

一利休栄葉文

字 定あしく小色帯一尺七寸五分 結ん貴所

似合ふるしは栄の葉よしてあは葉と云ふ

人の物ししつねん

一同辞世一軸

一草部屋肩衝

一兵庫茄子 ナスビ

いあへ取物の人利休へ初くこそそよれいけ茶入
長法あしくおもいしからんといふえれしはあきせ
ありとてしつねの体えすうあしく長法のとれと截キ
よれやといはれし蒲葎よあてりせゆるとい

一宗易布袋茶入

古備前

一驚小東

利休所持
出百會

袋ハ 太閤よりと宗易洋受の切名と蜀錦と云
け東宗旦の代ダイ有樂奇と招サウく盆點ベンテンより
奇東の盆點ベンテンりリと宗旦ソウタン貴キ下ゲの弟ニ初ハジメ屋ヤよ
アも秘ヒ蔵ゾウありリのノ換カ授ジュ人ニのノ知チはハとト好コトり

一白粉解

オシロイトキ
同不持三宅
木遺記副為

一筒井茶碗

秀吉公世系茶碗の自愛ゆと何れ時近習の
人ヒトよりヨリかカくク五イのノはハ缺カケきキれレしシ出デ奇キ義ギ沖チ
前マよヨおオらラくクをヲかカがガら

筒井のり乃五のようをシ井戸茶屋人答コタヘとい
りリとトいイひヒよヨくクれレとト後ノチ始ハジメよヨりリのノ機キ屋ヤ
みミとトりリゆユとト也

指月

五

一東陽坊

長次郎作一説昔利休招朝鮮人之造陶器者
使燒茶碗依是取朝鮮之朝字名朝次郎云

一醜濟

同

一小黒

同

一檢校

利休と云ふ所あり長次郎が燒茶碗人擇

きりくはよ一ツ紗りそふとやうのよる
茶碗の足知りては檢校殿より打敷ひうり
名付たかたしなり

一葛蒲

同作

一狐

同

一再來

同

指門

主

一閑居

同

一桃卷坊

同

一太郎坊

同

一一文字

同

一濡烏ヌレガラス

同

一桃底金モ、ソコ入

世三本有之云

一よかろう二重筒

利休作
出百會

一こしめ坊

同作

一瓢單

名顔回

瓢單ヒヤウタンひー巡礼の腰ヒヤウタン附ツケ子コかと休所

音月

三

望し〜く花入とる〜電取き〜は且翁作也
も達磨何りねあとの背に書けく

瓢單をん直ナ〜るか〜る理なり
何〜の妙よのぼる〜なりと

一内曇茶抄 ウチグモリ
宗易作筒
紹巳記有之

一雀香合 スズク
利休取持

釜

一阿弥陀堂
同取持爾後三斎ヨリ休夢へ御讓候時
阿弥陀ガ地獄ニ墮ツキタト戯レ給フト

一乙御前 オトゴゼ
同

一蒲團 トシ
同

一尻張 シリハリ
同

此外よりぐく同也と多病疎懶しそ人けり
く止ぬ夫東求堂に奇と搜り珍と集りて往
もさかるとにそ榮るの本意を正と人けり
雨とそものしぬ人けり存しそ墨寶名墨か
中にあるはよつとくちりみ御くこのみらに
人僻地のうそりて中からひそ同侶と會
河がそるぬとよゆりそ麩菜淡飯のまじり
富家のまうけりそつらと^{モリス}旅ま人の

いひきんをうに物薄しと情の何れとに及ぶ
と心へしととより富の貪にあらぬをとりと
月とゆへ人の志しとみきん人をとりがらん
あひ守ゆり

乙亥之冬臘ハ

洗竹庵

